

ある春の日に

先日、あたたかい春の日に孫を連れて散歩していたとき、昔のある出来事を思い出しました。

あれは今から30年ぐらい前のことです。

わたしはある友だちの相談に乗ったことがありました。その友だちの子どもさんは障害があり、彼女はその子のことで悩んでいました。

「わたしは障害のあるなしは人間のねうちに関係ないと思うよ。そこまで深刻に考えなくても大丈夫だよ。」

わたしは彼女を励ますつもりで言ったのです。しかし、その時彼女は、

「やっぱり、あなたにとってこのことは他人事なんやね……」

と、寂しげに言って目を伏せました。その時のわたしは、何とも言えない彼女の表情の意味が、今ひとつ理解できずにいました。

それからしばらく経ったあたたかい春の日のことです。教員だったわたしは、担任をしていた3人の障害のある子どもたちと、学校の周りで春の花を探していました。その時、たまたま道ですれ違った近所のおばあさんに

「先生、たいていやないなあ。」

と、声をかけられました。(「たいていやない」という言い方は、わたしの地方で、何か大変な状況にあるときに使われる表現です。)

そのおばあさんにとっては、何の悪気もない「たいていやないなあ」だったのかも知れませんが、わたしはその言葉にひかかりを感じました。「わたしと一緒にいたのが、障害のある子じゃなくても同じ言葉をかけられたらどうか……」と思ったのです。

そして、数日前の友だちの顔がわたしの脳裏によみがえってきました。わたしの「大丈夫だよ。」というあの時の言葉は、いかに表面的だったのか。彼女の思いに寄り添って、一緒に考えようとしていなかったのではないか……

おばあさんの言葉で彼女のおかれている「現実」に気づかされたのでした。

30年前に比べると、障害のある人に対する偏見も少しずつなくなってきたと思います。テレビからも「愛」や「思いやり」のメッセージはたくさん流れてきます。インターネット上では一瞬のうちに世界中の人とつながることができる世の中です。けれども、お互いが相手の思いに寄り添い、どれだけ分かり合えているのでしょうか。

となりで笑っている孫の顔を見ながら、この子が相手の思いに寄り添える人間に育つよう、どんな言葉をかければよいか、改めて考えた春の一日でした。